



TITLE:

(随想)奉天の終戦前後

AUTHOR(S):

藤井, 浩

CITATION:

藤井, 浩. (随想)奉天の終戦前後. 泌尿器科紀要 1966, 12(7): 611-612

ISSUE DATE:

1966-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112994>

RIGHT:

〔泌尿紀要12巻7号〕
昭和41年7月

泌 尿 器 科 紀 要

第 12 巻 第 7 号

昭和 41 年 7 月

随 想

奉 天 の 終 戦 前 後

社会保険広島市民病院 泌尿器科 藤 井 浩

昭和19年の後半から満洲も本土と同様 B29の爆撃圈内に入り次第に決戦の様相を ひしひしと身に感ずるようになって来た。

当時私は 奉天（現在の瀋陽）の満洲医科大学在学中で 戦局の緊迫するにつれて 学業も急ピッチで進められ 一方では防衛の任務にも当らねばならない事態になり 殊に 最高学年であった私達は卒業と云う大事をひかえて 夏休暇も殆んど返上して 昭和20年7月からは卒業試験が始まり 落着かない 毎日を過していた。戦局はすでに沖縄も米軍の手に落ち 本土の危機も刻々と迫り 或は本土 危うければ大陸で米軍と決戦する等の極端なデマさえ飛ぶ有様であったが 遂に 20年8月9日 不可侵条約を破棄して ソ連は突然 一方的に ソ満国境を突破して進入を開始するに至り 背後にも敵を迎える事態になった。その頃 すでに関東軍の精鋭は南方戦線に出動した後で 全く無防備状態のソ満国境を難なく突破したソ連軍の進撃は急で 最後の決戦は奉天の付近で行なうべく 市の周辺ならびに 市内の主要道路には 夜を日についで 対戦車壕を至るところに掘り 要所には古い高射砲を水平に据付けて対戦車砲の代りに使う等 貧弱な防備で心細い限りであったが 防戦に必死の作業を続けた。又 一方では 北満からの避難婦女子で 駅はあふれるばかりで 避難列車は朝鮮方面へ引きも切らず南下し 市内は騒然としていた。

併し 此様な情勢の間でも兎に角 卒業試験を了えねばならず 8月15日終戦の詔勅が放送される直前まで 私達のグループは産科実習の試験を受けていた。 „終戦!!“

遂に日本人も敗戦の悲劇を経験させられたが 日本内地では „国破れて山河あり“ で住まうべき場所があったが 異国の地で敗戦を迎えたものは たよれる山河もなく これから何をしたらよいかと考えて見ても仕方なくただ先方の出方次第で 本心に心細かった。

実際 ソ連軍の先発隊が 奉天に進駐したのは 8月21日で 終戦から6日後であったのは 本心に不幸中の幸でこの間に最後に残っていた内科 外科の試験を終了することが出来 卒業生全員は各科に各々志望によって入局することになり 私は 他の3名と皮膚科泌尿器科 橋本満次教授の教を受けることにした。併し この騒然とした中で 落着いた診療もなく 今後に備えて 先づ最初に医療薬器材の自給体制を整えることに全力を尽した。幸 奉天は 満洲 北支の兵站基地で 軍の倉庫には 沢山の医薬品だけでなく 総ての物資が豊富に貯えられていたので 丁度 橋本教授は附属病院長を兼務して居られた関係で 新入局した4名が中心となり 院長命令を受けて 限られた日限の中で出来るだけ沢山の医療器材を集めることに奔走した。

終戦直後は 敗れたとは云え まだ武装した 日本軍が沢山 奉天市内に駐留していたの

で 治安も 何とか保たれていたが 次第にソ連軍が奉天に近づくにつれて 中国人の日本人に対する態度は 日に日に悪化して 日本人の少ない地区では 夜間暴徒に襲撃されて無一物で日本人居住地に命からがらのがれて来る人も次第に多くなり 北から避難して来たもの 又 南に逃げ遅れたものが街にあふれ 次第に敗戦のみじめさを ひしひしと感ずるようになった。8月21日午後 遂に ソ連軍の第一陣は 装甲車に乗り 自動小銃を構えた いかにも精悍な イガグリ頭の兵を先頭に 40屯と云う 巨大な戦車の集団が進駐して来た。此の時から中国人の日本人に対する態度は 全く手掌をかえした様に変し 毎日 暴徒の日本人襲撃が続けられ 無抵抗に屈する他はなかったが 吾々は医療従事者としてどうやら身の安全を守ることが出来た。

中国人は 一方 ソ連軍に対して 進駐と同時に 何時 どこで造ったか 見事なソ連国旗を打ち振ってソ連軍を歓迎したり 速成の露語ではやしたり その変り身の早さには驚き入った。其後も 吾々の抑留期間中 中共 国府軍と数次の支配者の交代があったが その度に 新しい支配者に対する 速やかな順応性は 中国3000年の歴史で 多くの支配者交代に馴れて来た経験の賜と考えられ 又 終戦までの物資不足にひきかえ 終戦翌日から どこに隠していたか あらゆる物資が おびたしく出廻った事実は 中国人の底力を知らされた思いであった。

ソ連軍の兵士に直接に接したのは 進駐した翌日 独乙語の話せる戦車隊長が 慢性湿疹で来院した時で これが大学病院でのソ連軍将兵診療の第1号であった。この隊長は橋本教授が診察され 新入局の4名がその治療に当たった。隊長は誠に温厚な紳士で 勝者の立場でなく 1人の患者としての態度で診療を受けたのには感服した。又 この温和な隊長は 隊員の大多数が 前膊に番号を入墨した囚人の戦車隊を統率していたとは思えない程の人柄であった。しかし この様な人格者は ソ連兵の中には少なく 勝者の権力を振り廻し 中には昼間来院して看護婦等 女性の居ることを確かめ 夜 自動小銃を片手に 女性を要求して来院し 警備にあたっていた吾々を困らせた兵士も多く 生命の危険を感じる時も屢々であった。

さて 戦争と性病の蔓延はつきもので 多くのソ連軍将兵も例にもれず Gonorrhoe は勿論 Lues Ulcus molle 第四性病と 多様な病状で来院し 時には1日 尿道洗滌だけでも100名を越えたこともあり 又 30餘名の集団性病患者が入院治療を受けたり ソ連兵には気の毒だが 吾々新入医局員にとっては得難い経験であった。この診療の間に 知り合ったソ連兵は 個人的には 穏健な人が多く 20年を経過した今日でも 人なつこい顔が眼前に浮かんで来るが ひと度 共産主義とか 政治の話になると 固く口を噤み ソ連人同志が 警戒した様子になる事は この国の政治形態によるものであろう。又 ソ連兵同志が 僅かな口論の末 将校の1人が 兵を 衆人の眼前で射殺し その死体の処理さえしないで立ち去った現場を見せつけられ 戦時態勢下とは云うものの 日本人の常識では全く理解出来ない暗い一面を知らされ 身の縮む気持であった。又 いまだに不思議なのは当時のソ連軍の武器で 戦車を除けば 殆んど米 独 チェコ製で 医療事情も 一般兵士の科学知識も低級で 20年の歳月は流れたが 世界をリードする今日のソ連の軍備 宇宙開発や医学の進歩が見られようとは 予想出来ない状態であったことである。まだ色々の思出もあり 抑留中に得た貴重な経験も多く 書き尽せないが この20年間の世界の変貌は驚異の外なく敗戦当時のみじめさを思い浮べる時 転た 感慨に堪えない。

終に 巻頭の一文を書く機会を与えて下さった稲田教授に厚くお礼を申しますと同時に 貴重な誌面を駄文でけがしたことを深くお詫び致します。